

【書評】

『獣医学を学ぶ君たちへ 人と動物の健康を守る』

中山裕之 著、東京大学出版会、2019年5月刊、定価2,800円+税、A5判168頁

ここ3,4年、日本では獣医大学新設が話題となつたが、多くの国民が獣医あるいは獣医師に関しての情報は、市井の動物病院の存在以外、限られているものと想像される。この点は、進路決定の渦中にある高校生も同様であろう。本書はすでに、いくつかの他誌でも紹介されているので、ご記憶の読者もいらっしゃるであろうが、この第Ⅰ部は獣医療の概要を丁寧に、かつ真摯に語りかけるスタイルは、この方面を目指す若人がイメージする手助けとなる。とりわけ、本書冒頭部に登場する各種職場で活躍する獣医師の活写は素晴らしい。獣医大全般の広報でも、きっと、有益である。

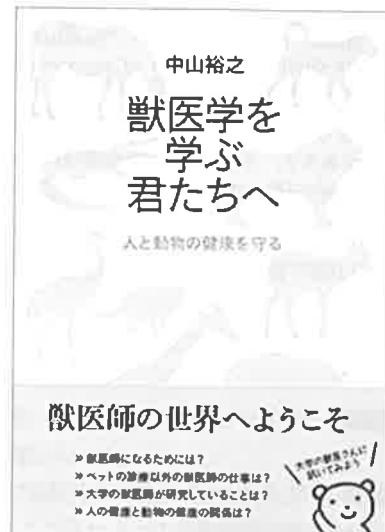
また、本書著者のご専門である獣医病理学について、多様な疾病（犬の可移植性性器肉腫を含む腫瘍、認知症のように老化に伴う異常など）をモデルに解説された点も（第Ⅱ部）、楽しく読むことが出来た。獣医学は、解剖学や生理学などを包含する基礎獣医学や外科学および内科学などのような臨床獣医学では優れた啓発書が先行するが、感染症学・病理学等の病態獣医学に関してはほとんど無かった。よって、本書は独特なニッチを占めることになろう。

さらに、今後の展望として、「獣医法医学」および「モニター動物」の可能性、「一つの健康」および「持続可能な開発目標 SDGs」との関係性（第Ⅲ部）などは、現職の獣医師が新たな地平を見渡す契機となろう。

SDGsに関しては、本紹介者が運営する施設（酪農学園大学野生動物医学センター）を拠点に展開される諸活動も、この目標群を反映したものであることを紹介した¹⁾。たとえば、多様な飼育動物資源を含む食料生産の開発や野生動物が生息する自然環境の保全保護などで、SDGsの各ゴールで提示された取組みと関連していたことが確認された。職人気質のプレーヤーで、それぞれ個別分野において活躍する獣医師は、どちらかというと連携面では希薄である。しかし、SDGsで扱われた各ゴール実現には、彼らは連携しなければならない。本書での明示は、その礎となる同志感の醸成に繋がるはずだ。

個別的な内容への注釈のようであるが、本紹介者は老年医学分野で使用される8-OHdG検出キットを用い、飼育類人猿のストレス状態を検査したことがあった^{2~4)}。したがって、本書の節「細胞の老化」は非常に刺激になった。動物園動物でも、動物福祉に基盤を置く飼育環境の適正化が進み、結果的に老齢個体が占める割合が急増している現状では、本書著者のアプローチ法は、非常に重要な示唆を与えるはずだ。

もう一つ、節「ラクダの赤血球」で、広辞苑がラクダの赤血球を有核とした誤記載の経緯とその周辺情報は、担当するコアカリ野生動物学の授業ネタとしても活用出来得るエピソードであった。ことほど左様に、本書は新鮮な切り口で、思う存分楽しめる仕掛けにもなっていた。



とりわけ高校生を含む多くの市民と若い獣医師が本書を手に取って頂くことを期待する。また、獣医学は畜産学を母体に発展した、いわば^{孫子}の一分野であり、本誌『畜産の研究』の熱心な読者諸氏にも、ご一読頂きたい。

引用文献

1. 浅川満彦: SDGs と関連した酪農学園大学野生動物医学センターWAMC の諸活動. 北獣会誌, 64: 106-110 (2020)
2. Mizuo, A., Ohshima, Y., Imanishi, R.ほか: Preliminary research on the excretion of urinary 8-hydroxyguanosine (8-OHdG) as a marker of protozoan parasites infection in captive western lowland gorillas (*Gorilla gorilla gorilla*). Jpn J Zoo Wildl Med, 14: 77-80 (2009)
3. 大沼 学, 浅川満彦, 村田浩一ほか: 酸化ストレス評価に対する尿中 8-hydroxyguanosine (8-OHdG) 量測定 ELISA キットを飼育下巣長類への試行研究—最近の概要紹介. ヒトと動物の関係誌, (30): 70-73 (2011)
4. 大島由子, 水尾 愛, 洲鎌圭子ほか: 市販尿中 8-hydroxyguanosine (8-OHdG) 量測定 ELISA キットを飼育下チンパンジー(*Pan troglodytes*)に応用した一例. 動水誌, 52 : 140-144 (2012)

評者： 浅川満彦

酪農学園大学獣医学群獣医学類 (Mitsuhiko Asakawa)